

アレクサンダー・フォン・フンボルト [Ⅱ]

—主として「自然の景観」をめぐる(続)—

馬場 喜敬

(平成8年9月30日受理)

Essay on Alexander von Humboldt (Ⅱ)

Yoshiyuki BABA

(Received September 30, 1996)

1. [Ⅰ]の2を引きついで「3篇の概略」

前稿(「A.v.フンボルト」[Ⅰ])で割愛した3篇の概略を記す。「オリノコ河の滝」「火山」「カクサマルカの高地」である。前稿でも、記述が、明確な対象のイメージを創出することができるかどうか危ぶんだのだったが、今回はそこで大いに絵図を活用しようとおもう。

(Fig. 1~8参照)

1) オリノコ河の二つの滝

オリノコ河はフンボルトが最初に目にする熱帯の大河である。ここにアツレスAturesとマイプレスMaipresという二つの滝がある。これが本篇の主たる対象であるが、オリノコ河の水源にからむドラドDoradoの神話の検討、河流の複雑な方向転換、多くの分流—その一つはアマゾン河と接点があるのではないかという憶測の実証的否定、また水量、水色(いわゆる「黒い水」現象)など、序奏は豊富な内容でみたされる。

「自然が与えてくれる喜びの高貴な部分は、心的交流にこそ基づいている。」「自然は熱帯の世界における以上に、われわれに偉大さの感情を以て迫るところは他のどこにもない。自然は熱帯でこそ力強く語りかけてくる。」このようにいうフンボルトを、オリノコ河はその広大な全域に誘い入れ、かれの心を捉え、引きずりまわしているかのようである。

「マイプレスの滝Kataraktelは、ナイアガラの140フィートという高い滝のように、渾大な水量が一度に落下する

という形式のものではない。またアマゾン河のマンゼリへのパンゴPango von Mansericheの滝のように、隘路にぶつかって加速された速さでそこを突き抜けていく、というのではない。マイプレスの滝は小さい段滝Kaskadeの無数の集まりという姿をとる。段滝は階段のように連なるもの、スペイン人はこれをラウダルRaudalとよぶ。孤立台地や突出岩礁があちこちに群成されており、これらが8,000フィートの広さの河床を、20フィート幅の水路に狭めて滝をつくる。

「・・・この大地こそ人々が素晴らしい光景を享受する地点である。1マイルの長さにならば、泡立つ河面が突然人々の眼前に供される。鉄のように黒い岩塊が、川面から廃墟のように、城のように、聳り立っている。どの島もどの岩石も、繁茂しようと努める森の樹木によって飾られている。濃い霧がいつまでも鏡のような水面の上を漂っている。蒸気を放ち、泡立つ雲が高い椰子の木の梢をひたす。潤いのある香気の中、輝く夕べの太陽の光線がぱっと差し染めると、光学的な魔法が始まる。色とりどりの曲線が消えてはまた現われる。大気の戯れ、エーテル的な像が揺らぐ。」

「裸地の岩の上を取り巻いて、さらさら流れる河水は長い雨期の間に、肥沃な土の島々をつくり上げていく。Melastome, Drosere, 小さな銀色の葉をしたMimoseやシダ類Farnkräuterで飾られて、島は荒れた岩盤の真只中に花壇をつくっている。それらはヨーロッパ人には、アルプスの住人がCoutlilsとよんでいる植物群への想い出へと呼び戻す。花で覆われている花崗岩の塊は、ひとり〔南仏〕サヴォワの水河から隆起している。」

「アツレスの滝も同じくラウダルRaudalであって、

マイブレスと同じく、河川はそこを通り抜けて全長3,000～4,000トイセン (Toisen) に及び、ラウダルはその中間の島世界 Inselwelt という姿を呈している。椰子樹の茂みは泡立つ水面の真中に聳えている。最古のラウダルはアヴァグリ島とヤヴァリベニ島 Avaguri u. Javari-veni の間、またスリパmana島とウイラプリ島 Suripama-na u. Uirapuri の間にある。

アツレス・ラウダルの最後のあたりのところに、黄金色の崖鶏 Kippenhühner, Pipra rupiola が巣を造っていた。二重の羽冠を有し、熱帯の最も美しい鳥の一つであり、東インドの鶏の如く斗争的である。」

さてアツレス・ラウダルの南の入口、河の右岸にアタツルイベ Atarupe の洞穴があって、フンボルトとボンブランはそこがインディオの墓所であることを発見することになる。椰子の葉柄で編まれた同形の籠に約600の保存状態のよい骸骨が収められていた。その傍らには骨壺も見出された。大きいものは高さ3フィート、長さ5.5フィートに及ぶものもある。「感じのよい卵型(楕円形)をしており、緑がかっており、鰐や蛇の形態をした取手付きで、上の縁は雷文(蛇行)や迷宮の図で飾られている。これらの飾りはミトラ Mitla のメキシコの宮殿の壁を覆っているものと極めてよく似ている。

フンボルトはいう、「このような類似性、これはあらゆる地帯の人間文化の様々な段階のなかに見出される。ギリシャ人とローマ人の間、南海のタヒチ島と他の島々の文化の間。」そしてその原因についてかれは「血統 Abstammung の等しさや諸民族 Völker の古くからの交流以上に、心理的な諸理由、すなわちわれわれの精神状態の内的本性に基づいている」とみる。

容器の年代、また骸骨の年代は、100年以上遡るとはみえなかった。しかしまさにその時代、アツレス人 Aturer がある運命が襲った。喰人種カリブ人 Karibe に圧迫され、かれらはこの滝の崖の上に逃れ、ついに死滅していったのである。このことには一つの不思議な事実が加わる。誰も知らなくなったこのアツレス人の言語を、マイブレスにいまなお棲んでいる一羽の老いたるパパガイが、このアツレス語を喋っているようだというのである。— のちにフンボルトの友人クルチウス E. Curtius はこの「おおむ」について詩をつくる。

アツレスのパパガイ (鸚鵡)

オリノコの荒地に／老いたるおおむ坐していたり／冷

やかに身動きもせず／その姿あたかも石の彫刻の如し
河水泡立ちて岩礁の間を走り／四散し 踊る／岩礁の上の椰子の樹々／陽光の耀きの中に ゆらげり

河波 高みを目指すも／天空の高さには達せず／水しぶきのなか／太陽は色彩の戯れを織りなす

下つ方 大波の砕け散る所／一つの民族 永遠の安らぎを保つ／そは昔自国を去りし民族／ここへぞ来つる

アツレア人たちは死せり／自由大胆に生きてる民族／彼らの最後の痕跡を／いま岸辺の葦の 草むす緑が隠す

アツレア人の最後なる者／おおむはその地で歎く／岸壁で嘴を磨ぎつつおおむは／大気をつんざく叫聲を響かせる

彼らの母国語の音声を／おおむに教えし少年たち／

おおむを養いし女たち／おおむの巣を造りし女たち

彼らはみな 岸辺に身体をさらし／打ちひしがれ横たわる／おどおどしいおおむの歎きの声も

誰ひとり目醒ますことはない

孤独なおおむは 見知らぬ世界に向けて／無明に叫ぶ／そしておおむは聞く 河水がどよめくのを／いかなる亡魂も気付かぬそのどよめきを

急流はおおむの姿を見やりて／岩礁の脇を 迅かに去る／白みかけることなき夜なか／アツレス・パパガイを見る者はいない

そして以上の話はこの詩とともに、フンボルトの予測を越えて今日まで語りつがれている。

「この種族の墓所を去ったとき、明るく涼しい夜であった。・・・色を帯びた環に囲まれた月が天頂高くにあった。月明りはくっきりした輪郭を呈していて、雲のように泡立つ河面を覆っていた霧の周辺を照らし出していた。

無数の昆虫は赤味がかった燐光を、草で覆われた大地の上に注いでいた。生き活きとした火により大地 (Boden) は赫々と照り映えていた。あたかも星に満ちた天の覆いが草原に降りて来たかのように。」

2) 火山の構造と活動

1823年1月24日、ベルリン・アカデミーで講演

1826年の「自然の景観」の第2版に初出。

数世紀来盛んになった地球上諸地域への探検旅行は学術上の成果を齎し、地球誌の内容を豊富にした。動植物種(有機的世界)、岩石種(非有機的世界)についてのみならず、地球体の歴史の考察を促した。山岳年代史、

山岳比較論（「長い間北方の郷土で謎のようにみえた諸問題は、その解決を赤道付近に見出すことになる。」）が浮上する。

前世紀の終り頃まで、火山の形態及び火山の地下の諸力について知りえたと思つたことは、南イタリアの二つの山、ヴェスヴィオ山Vesuviusとエトナ山Ätnaからえられたものであった。しかしこれだけを範型としてメキシコ、南アメリカ、アジアの島々などの強力な諸火山の形成過程を考えてはならない。このような手順は、狭いヒュッテのなかで永遠の帝王的都市ローマという模範をみると妄想したヴァージルの羊飼いと同一誤りに陥る。

さて、一体火山又は火山的vulkanischとは何か。それは地球内部深く所座をもっている荒々しい自然力のすべての作用、その自然力すなわち火によって融解された物質の噴出である。噴出物は粒状の煙や蒸気の円柱ということもあり（リスボン大地震のあとコラレスColaresで起こった現象）、汚泥、アスハルト、赤色粘土の場合（シシリア島のギルゲンチGirgenti、南アメリカのツルバコTurbaco）もある。また中部アメリカ（ガテマラ）、フィリピン諸島の原住民は火山を水火山と火火山Wasser u. Feuer Valkaneに分けるが、水火山とは、激しい地震の際、重々しい音を立てて、地下の水を噴出する火山のことである。

地球の現状をみると、地球上の全域で、円錐形火山が個々別々にあるのが最も普通の形式である（ヴェスヴィオ、エトナ、トネリファのピクス山、ツングラグア、コトパクス火山など）。この形式の山が、丘ほどの最低のものから最高では18,000フィートまで育っているのが見られる。

連鎖型もある。一見孤立に見える諸火山が、地下で連繋をもっていることが、噴火の同時性、或いは継起によって判明することがある。その際、地震もこの因果性の証明となる。以下はその壮大な例といえよう。

「1811年1月3日、アリゾナのサブリーナ島の突然の現象は、遙か西方にて1811年5月から1813年6月まで、ほとんど中断することなく、最初にアンチル諸島、次いでオハイオとミシシッピの平原、最後にはヴェネゼラ或いはカラカスの平原と向かい合っている海辺を震撼させた恐ろしい地震の前触れであった。この国の美しい首都の完全な崩壊の30日後には、アンチル諸島に近い聖ヴィンセントSankt Vincentで、長らく休止していた火山の爆発が続いた。奇異なる自然現象がこの爆発に伴った。

1811年4月30日、この爆発が起きた同じ瞬間、南アメリカでは恐怖を起こさせる地下の爆音が2,200地理学平方マイルの地域にわたって聴きとれた。ヌラ河Rio Nulaの合流点付近でのアプレ河Apure沿い住民は、この騒音を、ヴェネゼラから遠く離れたところの海辺の住民と同様、重砲の轟きと比較した。アプレのヌラ河合流点を通り、オリノコ河へ、そして聖ヴィンセントの火山までは、私の経験では、直線で157地理学マイルが数えられる。確かに大気を通して伝わったこの騒音は深い地下に原因をもっていたに違いない。その強度は、噴火中の火山に近いアンチル海の海岸で、陸地の内部すなわちアプレとオリノコの河床と僅差しかない。

「ヨーロッパにとって歴史的に重要となったリスボンの大地震の例を加えよう。1755年11月1日、この地震と同時に、スイス湖とスエーデンの海辺沿いの海が烈しく震動されたのみではなかった。アンチル諸島東部、潮位が28ツォル以上に達することのなかったマルチニクMartinique、アンチグアAntigua、バルバドスBarbados付近で、潮位が突然20フィート上昇した。すべてこれらの現象は、地下の諸力が、地震においては力動的、緊張的、震撼的であり、火山においては生産的且つ化学的に変化しつつ姿を現わすということを証明している。これらの現象はまた、こうした力が、表層的な薄い地殻からでなく、地球内部深くから、亀裂や埋められていない地下道を通して、地表の極めて離れた地点に向かい、同時に影響を及ぼすことを証明している。

「正確な測量」の重要性。—Vesuviusでの実践は省略する。

さて、何が火山で燃えるのか。温度を惹き起こすものは何か。

「地下の温度の原初的な原因は、すべての遊星と同じく、形成過程そのものである。すなわち、宇宙的煙霧状液体からの、球形化する塊の分離、地球の層の種々な深さの放熱による冷却という過程である。すべての火山現象は、多分、われらが遊星の、恒常的或は一時的な内部と外部の結びつきの結果である。弾力的な蒸気は、溶解し酸化する原材を深部の隙間を通じて押し上げる。火山はかくして断続的な地震である。溶岩流へと凝固する金属・アルカリ・土壌などの流体的混合物は、もしそれが隆起してどこかに出口を見出すと穏やかに静かに流れ出る。類似の仕方で古代人は（プラトンのパイドンによれば）すべての火山の火焰流は、ピリフレグトンPyriphl

egethonという地下世界の河流からの流出として表象されている。

「化石誌」が提供している不思議な現象について。

「熱帯の動物形態・樹木風シダ、椰子、竹林は、寒冷な北国では地下に埋没している。原世界Urweltの到る所で当時の気候状態と矛盾する有機的形（物）の配置を示しているが、これらの問題解決のため考え出された若干の仮設（すなわち）彗星の接近、黄道傾斜の変化、太陽光線の強度の増大などの何れも、天文学者、物理学者、地質学者を同時に満足させえない。私は一貫して地軸、或いは太陽黒点説を客認している。以上のほか、どの惑星でも、物体の酸化の過程、沈澱、化学的变化の受容、電磁氣的負荷の増加、内部外部間の交流などという温熱放出の多様な原因が認識されるとおもう。

「有史前の世界で、分裂した地殻がその割れ目から温熱を放射していた所では、ひょっとしたら何世紀間、あらゆる地域で、椰子、樹木風シダや熱帯のすべての動物が繁茂繁殖することができたかも知れぬ。私は「両半球における岩石類の成層に関する地質学的試論」でこうした見方をし、火山の温度は地球体内部の温度とみた。現今怖ろしい荒廃を惹起していると同じ原因は、かつて、新しく酸化した地殻の上や深く亀裂の生じた岩石層の上に、最も繁栄した植物の成長を、どの地域でも惹起しえたであろう。

「この論文の結びで、私は種々様々な世界諸地域で蒐められた諸事実に、不確かな仮定的推測を付け加えた。「哲学的自然誌」は、単なる自然記述の欲求をこえる。それは個々別々の諸事実の不毛な集積から成り立つものではない。好奇心に富み活気にみちた人間の精神は、時として現在から先史時代の暗闇にさまよい込み、まだ明瞭に認識されえないことを予感する。そして古代から多様な形式のもとで繰り返される地質学の神話を楽しむことを許されてよからう。

3) カクサマルカの高地

一旦Cubaに渡り、再び南アメリカの大陸に戻ったフンボルトのこの地での最終旅程は、カルタヘナCartagena (1801.5) ◇ボゴタBogota (1801.7) ◇パストPasto (1801.12) ◇キトQuito(1802) (チンボラソ山登山) ◇リマLima (1802.10.12) という2,000kmの旅となった。フンボルトはここで古代インカの国土を歩いている。ロクサでは17世紀半ば、ヨーロッパにもたらされたキ

ナ樹（キナ皮）をめぐる歴史が語られる。これがすでにポルトガル、スペイン（当時のヨーロッパ勢力）によるこの地の物産の大規模な搾取の記録である。

次いで、ロクサの山岳の中心点から、南南東に向かってアマゾン河に至る間の、荒涼たる山岳地帯（大部分9,500フィート以上）の描写。荒天すなわち濃霧、雹の嵐など、その間に、温度計は氷点下5度まで急降下することを告げ、ヴォルタ電圧計は、数秒のうち、大気圏の電氣的緊張によるプラス・マイナスの急変を示した。フンボルトの自然研究がInstrumente（科学的小道具）を駆使することを目ざした一端がここにさりげなく顔をのぞかせている。

インカの舗装道路と巨大建造物の遺跡の記述がくる。場所によっては14,568フィートの高所（殆どモンブランの高さ）にあるものから海拔零地域のそれまで。落差の大きさは他に類がない。

インカ帝国の統治の実情が、これらのインカ道路の整備からうかがえ、実際にそれを見たであろうサルミエントオをして「カール大王でさえ、このようなことの一部だに為しえなかった」と嘆賞せしめたこと。

しかしフンボルトはやがて、インカの王たちが強大な統治力のもと蒐めた金や銀を、狂暴な侵略者たちによって、いまわしい方法で奪い去られるシーンを記述することになる。最後のそのインカの王の名はアタファルプ。

「1532年11月から幾ヶ月かの長期にわたって、かれは一つの部屋に幽閉された。苦しめられた君主は助命のため言った。「金の延べ棒、板金、容器に収められた金を、手の伸びるところまで高く積み上げさせよう。」

部屋そのものについてクセレッツは長さ22フィート、幅17フィートと報告している。クスコ、ファイラス、アマチュユ、パチャカマックの太陽神殿の財宝のどれだけが、宿命的な1553年8月29日（インカ滅亡の日）までに蒐められたか、については、すでに1560年、20才でペルーを去ったガルシラソ・デ・ラ・ウエガは、3,838,000デュガド・ド・オロ（Ducados de Oro）と評価している。

インカは滅んだ。しかし、インカの子孫は残っているのである。「悲しき建築遺物の中に消え去った光栄のもと、君主の子孫たちはカクサマルカに住んでいる。」「この家族は大いなる貧困のなかでも、足ることを知り、歎きもなく、苛酷にして不当な運命をまるまる甘受して生きている。」

しかし彼らは地下に眠っている財宝についての伝承を疑っていない。だが誰一人としてそれを掘り出そうとはしない。それは罪である。加えて、かれらは信じている。かれらの財宝はインカ帝国再建の日のためのものであると。

フンボルトは、インカの人々の運命の「甘受」、そして生の「夢想」をどう受けとっていたであろうか。私には、この〈甘受〉と〈夢想〉という客観者的判断は単純には受入れられない。それは、どの民族にも共通の、人間の尊厳、自己の人間性への熱い情念に対しての無知さを示すものではなかったか。事実、フンボルトの読みのヨーロッパ人的歴史的制約は、何れ歴史が明るみに出すことになったのである。(フォルスターとの差異も浮彫りにして。)

「アンデス山脈の尾根からの南海の最初の眺望」という一節が本篇をしめくくる。

「険しい山嶺の脊の上で、地底の多くの波動によってわれわれが遂にゲンガマルカ高地の最高点に到達したことがわかったとき、長い間ベールをかけられていた蒼穹が突然晴れ渡ってきた。強い南西風が霧を追い払ったのだ。山の稀薄な大気の深い碧りが上空の羽状の雲の狭い列の間に現われた。

「われわれはいま初めて南海を見た。われわれはそれをはっきりとみた。海岸近くでは、ある大きい光塊(太陽)が反射しつつ、予想したよりも遠い地平線のため、見当もつかない広い空間をのぼりつつあるさまを。・・・この悦びが温度計を使うことを忘れさせたが、のち頂上よりは低い酪農場での計測により、われわれが海を初めて見た地点は8,800~9,000フィートの高さにちがいない。」

フンボルトはこの経験をG. フォルスターへの敬意と結びつけることを忘れない。「この南海の眺めは、教養の一部と願望の多くの方面をゲオルグ・フォルスターとの交際に恩恵をうけている者にとっては、厳粛なあるもの(祝祭的なもの)をもっていた。」フォルスターは「私の旅行計画を、すでに早くからその一般的輪郭において知っていた。」という。実際のところ、フンボルトの路は南アメリカ赤道地帯へと向かい、フォルスターの世界周航(南太平洋の島々など)とは道筋を異にした。しかしともにヨーロッパを脱し、なかにあっては(anschauungでは)はっきりみえてこない自らの文化への反省の意図が秘められていた。

すでに1794年に世を去ったフォルスターはフンボルト

の現実の旅路を知る由もない。フンボルトのこのしめくくりは天国にいるフォルスターへの全体的報告でもあったであろう。—最初にAnsichten der NaturのAnsichten der Naturの訳語にこだわる事情にふれた。いまはそれ以上に本書がAnsichten der Geschichteの意味合いをもって

〈付〉

前稿での「原始林での夜間の動物の生活」の発表年代の欠落をめぐって。

前稿の冒頭で「自然の景観」は7篇から成るものであり、その順序は次の如くであることをみた。

1. 草原と砂漠
2. オリノコ河の滝
3. 原生林での夜間の動物の生活
4. 植物観相学的構想
5. 火山の構造と活動
6. 生命力
7. カクサマルカの高地*

その上で第1版(1808)、第2版(1826)、第3版(1849)との収録篇数のちがいが、順序のちがいが、なども見た。重複をいとわずに再記する。

第1版(1808)

1. 草原と砂漠
2. 植物観相学構想
3. オリノコ河の滝

第2版(1826)

- 第1巻、
1. 草原と砂漠
 2. オリノコ河の滝
- 第2巻、
3. 植物観相学構想
 4. 火山の構造と活動
 5. 生命力

第3版(1849)

Ansichten der Natur, mit wiss. Erläut, Dritte verbesserte u. vermehrte Ausgabe, 2 Bände(J.C. Cotta) Stuttgart u. Tübingen, 1849 Bd I : XVIII u. 362 s./Bd. II:407s.—Das Hochland von Caxamarcaが第2巻(「高地」)の末尾に加わる。

さて、この〈第3版(1849)〉の記述に問題があった。この項は、上掲Darmstadt版のHanno Beck: Kommentar zu dieser Ausgabe, s.363-364によって記したのであるが、第2版までにみられなかった2篇、「高地」「原始林」のうち、前者のみが記されるにとどま

た。

Hanno Beck氏もこれに気付く、機会をえて加筆修正したいという。要点は2つ。

- (1) Der Essay “Die nächtliche Tierleben im Urwald” ist zum ersten Mal in der dritten Auflage “Ansichten der Natur, 1849” erschienen.
- (2) Humboldt hat ihn im juni 1849 in Potsdam erschrieben.

〔「原始林」は「自然の景観」第3版、1849にはじめて公刊された。フンボルトはこのエッセイを1849年6月、ポツダムで書き上げた。〕

以上の如く、本稿も、前稿のこの部分を修正したい。「原始林」が第3版の第1巻であったか第2巻であったか、すなわち配列順についてはなお未知。

Gesammelte Werke von Alexander von Humboldt, そのElfter Band (“Ansichten der Natur”) に注目しよう。(11-12巻合冊本でBand 11が「自然の景観」をおさめる。)そこでの配列は以下の如くである。

*Cotta版

1. Über die Steppen u. Wüsten(s.4-19)
Erläuterung u. Zusätze(s.20-121)
2. Über die Wasserfälle des Orinoko(s.122-138)
Erl. u. Zus.(s.139-153)
3. Das nächtliche Tierleben im Urwald
(s.154-162)
Erl. u. Zus.(s.163-169)
4. Ideen zu einer Physiognomik der
Gewächse(s.170-187)
Erl. u. Zus.(s.188-280)
5. Valkan(s.281-298)
Erl. u. Zus.(299-302)
6. Lebenskraft(s.303-307)
Erl. u. Zus.(s.308-310)
7. Caxamarca(s.311-334)
Erl. u. Zus.(s.335-362)

戦後のReclam版、Darmstadt版の配列はこの1859年全集版に始まるものであった。

ところで、遅い時期に書かれたこの2篇のうち、「カクサマルカの高地」が最終章をなすのは理解し易いが、「原始林」が第3章目におかれたのは何故か。

恐らくこれはTropische Amerika-Reise (熱帯アメリカ旅行)の道程によるものであろう。すなわち第1篇「草原と砂漠」は、クマナ上陸後、そしてカラカスへの海岸沿いの徒渉ののち、初めて目にした「リアノス大草原」の記述である。それに続くのがOrinokoahrt (オリノコ河舟行)であって、二つの滝がとり上げられる。そしてオリノコ河川圏とよいいアプレ河畔に近い「原始林・夜間」の体験の章がその生まなましい記憶を底流として、この第3章としておかれたのは十分に理解される。

あらためて、7篇を、執筆od.講演年代順に並べてみると、本書を貫くライトモチーフを考える上に役立つであろう。

1. 1795-生命力(シラー主宰誌“Horen”)
2. 1806-植物観相学構想(1806.1.30 ベルリン・アカデミー講演)
3. 1807-草原と砂漠(1807.1.29 ベルリン科学アカデミー講演)
4. 1807-オリノコ河の滝(1807.8.6 ベルリン・科学アカデミー講演)
5. 1823-火山の構造と活動(1823.1.24 ベルリン・科学アカデミー講演)
6. 1849-原始林での夜間の動物の生活(1949.6 Potsdam)
7. 1849-カクサマルカの高地(?)

前述したように1827/28年にはフンボルトは「コスモス講義」Kosmos-Vorlesungenを始めている。それをもとに著作としての「コスモス」“Der Kosmos”も1844年に刊行を始めた。「自然の景観」第3版(1849)の5年前である。このような状況においてなお、フンボルトに「自然の景観」の補強版(第3版)の完成に力を注がせたものは何であったか。

かれの幼児の体験。かのフリードリヒ大王の治世も終わろうとする頃、Berlin植物園にあった熱帯からの使者の如き一本の龍血樹の巨木との対面、テゲル館内の生活に息を詰まらせていたアレキサンダーの血汐は燃えた。ゲオルグ・フォルスターとの出会い(前出)。蹉跌はあったが、心の焰はおさまらなかった。ついに一大研究旅行実現。Naturgenuß, Naturgemäldeという概念も創出された。こうしたおもしろいすべて包み込む書物への熱き想い、解明の鍵はここにあるであろう。

付. Fig.1~8

Fig.1

Schiller, Wilhelm, Alexander von Humboldt, Goetheの4人の絵図がここにあるのは, “Ansichten der Natur” の関係でいえば, これを機にシラー (36歳) とアレクサンダー (26歳) は相織り, シラー主宰誌 “Horen” に「生命力」が掲載されたことである。この一事を除けば, AlexanderとGoethe (49歳) 交流がこの日に始まったことが特筆される。植物に関する事柄を中心に2人の著書, 意見, 手紙の交換はしげくなる。この場所はJenaのWilhelm邸。時は1794年1月。

この4人からただよい出るものはドイツ近代フマニズムの雰囲気である。詩人2人はSturm u. Drang (Goethe: Werther; Schiller: Die Räuber) を共有した。Wilhelmはより学究的にだが同じ精神を呼吸している。ところでAlexanderは? ゲーテは2人を「精神的双子児」とよんだ。しかしAlexanderには, この年代に先立って (1789.2.27), ある友人宛に以下のような手紙を書いていた。

「・・・兄は死にもの狂いで勉強を続けることでしょう。もうKantの書いたものは全部研究し尽くしています。そして自分の体系のなかに籠って, なおも体系を紡ぎ続けています。彼からはたくさん学ぶことがあると思います。でも私には今そんなことを考える時間がありません。私は個別的な対象を相手にしておりますので, 思弁は壁の釘にでも掛けておくしかないのです。」

心は思弁にではなく, 経験的実証的な探求にまっしぐらに向かっている。「自然の景観」の土台となる南アメリカ熱帯地域への旅立ちの萌芽はすでに強靱に育っていた。

Fig.2

1799~1804の南アメリカ熱帯地域旅行はOrinoko河周辺地域からはじめられる。

そしてUrwaldhütteが設営される。さてこの小舎の中のテーブルには科学的の道具 (Instrumente) が大事に並べられていた筈である。Alexanderの旅行がそれ以前の旅に対して決定的意義を持つ所以は, 近代的計器による測定であった。かれは「新大陸の旅の歴史的関係」の中で, 「我々にとっては機具の方が, 自分たちの健康よりも心配だった」と書いている。

Fig.3 Wasserfall

オリノコ河の滝のイメージはなかなかつくり難い。僅か1枚の絵を以てしてでは充分ではないとおもえる。が実地に見聞に赴くまではこれを役立てたい。もっとも現在なおこの絵図と同じき形姿が保たれているかどうかは覚束なく思えるのだが。

Fig.4 Palmen u. Ananas-Planzen

(椰子樹, そしてバナナ植物)

「植物観相学構想」で, 植物の主要型16 (od.17) が挙げられるうち, 最初にくるものはPalmenである。筆頭ということには意味があろう。フンボルトは「最も高貴なるもの」という規定を与える。反射的にかのS.モームの諧謔的な評言がうかぶ。「コケティッシュなパーのマダム風の姿態!」。今日南海の浜辺に, 椰子樹を見うる人々の数は激増している。この絵の如くならば, やはり人々はフンボルトの見方に共感をもつであろうか。

Fig.5

Geographie der Pflanzen in den Tropen-Ländern, ein Naturgemälde der Anden, gegründet auf Bobachtungen und Messungen, welche von 10 Grade südlicher Breit angestellt worden sind, in den Jahren 1799 bis 1803. (熱帯地域の植物地理学, 南緯10度で1799年から1803年まで, 観察と測量に基づくアンデスの自然画)

◇ “Ansichten der Natur mit wissenschaftlichen Erläuterungen und sechs Farbtafeln, nach Skizzen des Autors”, Die Andere Bibliothek, Herausgegeben von Hans Magnus Enzensbergen, 1986.

Naturgemälde (自然画) という語は, 「自然の景観」では第1論文「草原と砂漠」(Reclam s.30), 第2論文「オリノコ河の滝」(同s.33) など, 早い年代の文中で使われ始める。

「・・・私は以上で草原の自然画についての試論をおわる。」(「草原と砂漠」)

「私は前章で雄大な資料の一つの自然画に合一させた。(「オリノコ河の滝」) など。

ここでは「アンデスの自然画」という使われ方であり, この絵の挿入されている箇所は上掲書s.432「生命力」の末尾の方である。論文と絵との関係は定かではない。ここに掲げたのはNaturgemäldeという語乃至概念の

理解のための一例とするため以上のものではない。

一つだけ指摘しうるのは、Naturgemäldeに先験的統覚による「現象の多様性の統一」（カントのカテゴリー論的用語をかりる）という含意があることである。「ひたすら経験を、というにとどまらず、普遍への関心があり、この点がG.ForsterとA.v.Humboldtを分けている。」とはE.ヴァイグルの言である（Engelhard Weigl:Instrumente der Neuzeit, 1988）。なお、Naturgemäldeには客観性尊重の面があるに対し、Naturgenußは主観性に即する概念であることを、これまでのフンボルト論の枠外に出て論究することを別稿の課題としている。

Fig.6 Chimborazo とFig.7 Garten des Inka

フンボルトの高山登山の一例としてのChimborazoの雄姿を眺めて頂きたい。またInkaにまつわる原住民の話をよく聴き取るためには、事実のおもみがにじんでいる“Garten des Inka”は役立つであろう。

Chimborazo : 上掲書（“Ansichten der Natur”）Tafel 1:

Chimborazo, gesehen von der Hochebene von Tapia-s.96/97-

Garten des Inka : A.v.Humboldt-Aus meinem Leben, München,1989,s.131.

Fig.8 Singakademie in Berlin,1848:

A.v.Humboldt-Aus meinem Leben, s.186



Quadrumvirat

Schiller, die Brüder Wilhelm und Alexander von Humboldt vereint mit Goethe in dessen Sinn: »Wenn sich die Gleichgesinnten nicht anfassen, was soll aus der Gesellschaft und der Geselligkeit werden?«

Fig. 1



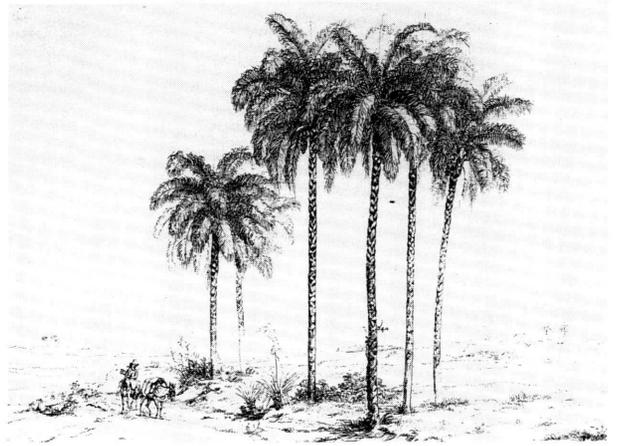
Humboldt und Bonpland in der Urwaldhütte.
Gemälde von Eduard Ender (1822-1883)

Fig. 2



*Basalt und Wasserfall von Regla
(Ebenda, Tafel 22)*

Fig. 3



Rugendas: Landschaft mit Palmen und blühenden Ananas-Pflanzen.
Federzeichnung, 1825
Staatsbibliothek zu Berlin – Preussischer Kulturbesitz

Fig. 4

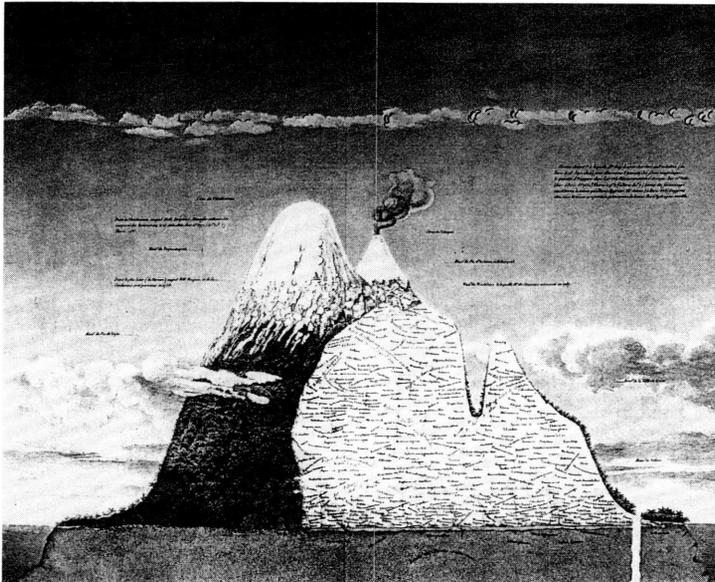


Fig. 5

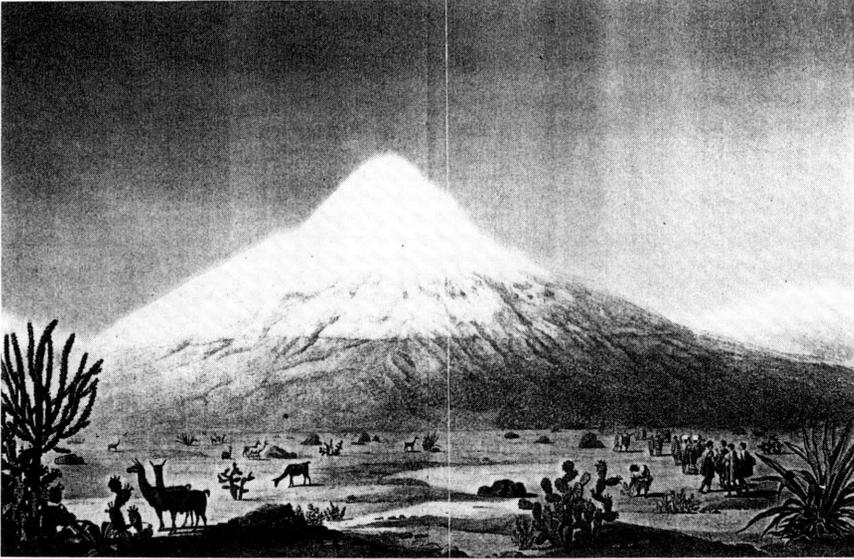
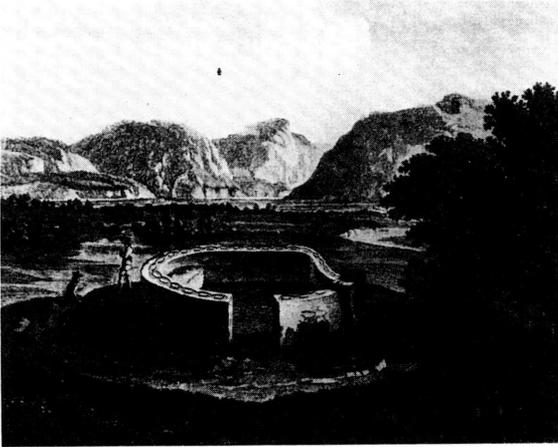
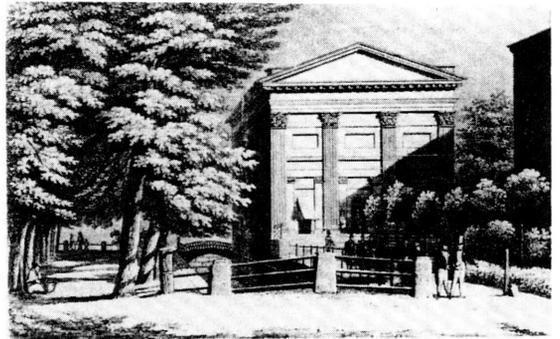


Fig. 6



Garten des Inka
(Ebenda, Tafel 19)

Fig. 7



*Alexander v. Humboldt zum schwachen
Beweise der Dankbarkeit für die ange-
nehmen, lehrreichen & erhellenden geistrei-
chen Umganges den er in Barnaul
im Hause Sr. Exc. des Herrn Intend[anten]
verlebt hat.*

Singakademie in Berlin, 1848.
Hier hielt Humboldt im Winter 1827/28 seine berühmten
öffentlichen Vorlesungen über physische Erdbeschreibung.
Stich von Alexander Marx (geb. 1815)

Eintragung Humboldts im Besucherbuch in Barnaul
(23. Juli/4. August 1829):
Alexander v. Humboldt zum schwachen
Beweise der Dankbarkeit für die ange-
nehmen, lehrreichen Stunden geistrei-
chen Umganges, die er in Barnaul
im Hause Sr. Exc. des Herrn Intend[anten]
verlebt hat.
(In: Molodež' Altaja, Nr. 184 vom 13. 9. 1969, S. 2)